風にあそばれて

黒耀石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風にあそばれて

【Nコード】

N2079A

【作者名】

黒耀石

【あらすじ】

それは、気付かない内に拾っていたモノ。純粹で幼ない頃に、誰もが持っていた『好奇心』は、時として不思議を呼ぶ事もある！つて感じの、妙な笑いあり、たまに感動あり……で送る冒険ファンタジー。

第一式：時間の浪費

「ご来店、誠にありがとうございましたー！」

夕暮れ時に賑わう近所のスーパーで、買い物袋を提げた少年が一人。両手の袋には、いかにも買い溜めが狙いとも言いたそうな量の食料が入っている。

しかも、見た目に反していない袋の重さ。

晩御飯の調達と、言わゆるお使い係を母から頼まれた訳である。

「あつ！てめ、新哉しんやも手伝え！」

兄の事など気にせず、ウインナーを呑気に試食している弟に呼び掛ける。

「お前そうやって、晩御飯食べられない……とか言うんじゃねえぞ？」

「らいじょーふ（大丈夫と言っている）だよ！んぐつ、お兄は買い物終わったの？」

喉に詰まらせる直前まで試食品を頬張る弟は、兄として微妙に赤っ恥な時もある。

例えば、今とか……今とか、今の行動に。

それでも、自分の事を慕って『お兄』と呼んでくれる所に弱いのだ。

「何でも良いから、早くこれ支えてくれ！」

「うん、分かった！」

側に寄って、下から両手で袋を支えながら進む。

周りから見れば、これほど珍妙な光景はめつたに拝めない。

「お兄、何か周りの人こっち見てない？」

「気にするな、弟よ……世間は冷たいもんだ」

一人赤面しながら、袋の影に顔を隠す様にして家路を急ぐ。

暫くこの店には来れそうも無い……と、真剣に思える状況であった。

「し、新哉……本当に支えてるよな？」

「う、うん……」

それでも、何とか順調に歩いている二人は、今現在、人通りの少ない道を進んでいた。

理由は、足元が全く確認出来ないから。

空き缶を踏み、天下の大通りで派手に転倒。

なんて事になったら、それこそ危ないし、何より普通に出歩けなくなる。

「後ろの状態は？」

「人無し、障害物は……右と左に電柱あり」

「よし……じゃあ、このまんま真っ直ぐな」

余裕を装うが、迫る筋力の限界を感じていた。

後ろは見えないし、もちろん下も確認不可能。

「あっ！お兄、お兄」

突然、新哉は進行方向に何かを見つけたらしく慌てて口を開く。

「何だよ？後ろから誰か歩いて来たのか？」

「違うくて……その」

ぐいぐいと進む兄のスピードに戸惑い、発見したその事を言えない。

「だから……下」

「えっ？」

聞き返した刹那、何かを強かに踏んだ感触。

声を出す前に、体が少しずつ斜めに傾いて行くのが分かった。

そして、上にのしかかる様にして迫る袋。

（新哉あ……、今度からそういう事は転ぶ前に言っただぞ……）

と、地面に付くまで数瞬の間に考えた。

「お兄……無事で」

新哉は、助ける事もせずに成り行きを見守る。

次の瞬間、袋の中身をぶちまけながら、兄が激しく地面に落ちたの
は言うまでも無い。

「お兄、大丈夫？」

「あいてて……」

あれだけ滑稽に落ちていながら、幸運にも擦り傷だけで済んでいた。結局、撒けた食糧を二人で回収していて、帰りが遅くなってしまうた。

辺りは暗くなり、もはや晩飯の時間では無い。

「ふふん、でもお兄に良いお知らせがあるよ」

嬉しそうな顔で、新哉はポケットに手を入れて中を探った。

「お、おい！お前いきなり手え離すなよ！」

急に重さを増す袋に、ぐつと両腕に力を込めて何とか堪える。

「あっ！忘れてた」

「ったく……家に帰ってからで良いから、な？」

「うん」

そしてまた、新哉が代わりに後ろを確認しながら進んで行く。遅い様だが、今から必死に言い訳を考えている二人であった。

第二式：新哉は何を拾ったのか？

玄関の前まで来ると、重たかった袋をゆっくりと地面に置いた。久し振りに味わった楽な感覚に、二人は揃って息を大きく吐く。

「つ、着いた……」

「うん……でも、お母さん怒るかな？」

新哉の何気無い一言によつて、場の空気がいきなり重くなる。

こんな時のお約束は『弟の責任は、兄の管理能力の欠如』とストリートに言われる例だ。

しかも、今回は間違い無く上記そのもの。

自分が食糧を撒き散らしてしまっただけに、言い訳をする立場が無い。

「うつ！……そりゃあ、地獄巡りを経験するかもしれんな……」

声が家内へ聞こえてしまわない様に、小声で耳打ちをする。

これが母の耳に入ったりしたら、今度こそ情状酌量の余地は無い。

だからこそ、この機会に悪行を一気に話してしまおうと企む。

「この前もな、悠祐ゆうすけに言うなら、新哉のしつけをした方が得よ！とか何とか言われたんだぞ？」

まるで泉の様に溢れ出る言葉を、勢い良く弟に吐き出して行く。

「でも、お母さんが、お兄を下の名前で呼ぶのは珍しいよね」

「そう！だから注意しないといかんのだ」

ちなみに、悠祐が母から下の名前で呼ばれる事は万が一にも無い。

つまり、悠祐と呼んで来る時は普通に危ないという事になる。

「それに、昨日も……って痛っ！！」

耳打ちの途中、いきなり悠祐のこめかみに走った鋭い痛み。

それに耐え切れず、患部を抑えて蹲る。

「あつ……いたの？」

そして、悠祐の耳に届いた姉の声を聞いて、すぐに状況を理解した。これは、姉きが扉を開けた事によつて起きた、こめかみの打撲。

痛みをせいで軽く涙目になりながらも、悠祐は顔を上げる。

「あ、姉き……」

文句の一つでも言おうとする悠祐だが、姉は別の方向を向いていた。関心は、完璧に弟の新哉へ注がれている。

「あの……姉」

「お姉ちゃん、これ！頼まれた買い物」

悠祐の言葉を遮り、新哉が言葉を放つ。

「偉い偉い！じゃあ運ぶの手伝ってくれる？」

「うん！」

「あ、あの……」

取り残された悠祐を他所にして、二人は袋を抱えるとそのまま家中に入ってしまった。

「新哉、お前まで……」

悠祐の思いも虚しく、玄関の扉がぱたんと音を立てて閉じる。

(み、未来さん……？普通そこまで本気無視しますか……)

心の中で姉の事を本名で呼びながらも、取り残された悠祐は複雑な心境で家の中に入った。

玄関の扉が、何だかいつもより重く感じた。

「で、その“良いお知らせ”って何なんだ？」

晩飯を済ませると、悠祐は用があつて新哉を自分の部屋に招いた。

悠祐が聞きたいのは、何を隠そう、例の『良いお知らせ』である。

この際、下らない話でも聞いて置かないと、怪我を負いながら買い物を終えた意味が無い。

内心、あまり期待はしていなかった。

「知りたい？」

「うん、知りたい」

話を先へ先へと焦らす新哉にもめげず、悠祐は根強く訪ねて掛かっ

た。

「それは……」

笑顔を浮かべながら、新哉はポケットの中に手を入れて中を探る。

「これだよ！お兄」

そして、素早く手を出すと、得意気に悠祐の目の前へそれを掲げた。

第三式：心の流動

「……………石!?!」

新哉の手には、余裕たっぷりに掌へ収まってしまふ程の小さな石が置かれていた。

電灯の光に照らされ、淡い紫色の光沢を悠々と放っている。

「ちょ……………ちょっと、貸して貰えるか?」

「うん」

新哉の返事を聞き、悠祐は指先でそれを摘む様にして持ち上げる。光を反射させながら紫色に輝くそれは、体温よりかなり冷たく感じた。

「へえ……………」

石を上下左右に傾け、まじまじと見つめる。

傷は無く、表面は河原に落ちていた小石の様に丸みを帯びている。とても、あんな人通りの少ない道に落ちていた代物とは思えない。

「……………新哉、この石見てどう思う?」

持っている石を近くの机に置き、新哉を呼び寄せて確認させる。

「どう?…つて、紫色で綺麗だと思うけど……………」

「……………純粹!そんな新哉にお兄は感動した」

思惑と外れたのか、新哉の肩に手を掛けて一直線に顔を凝視する。

「良いか?…こんなに神秘的でなおかつ趣のある素敵な石だ……………」

そう言い放ち、新哉の肩から手を離してゆっくりと部屋を歩き回る。

新哉の怪訝な表情も、全く気にしていない。

「しかも、紫だぜ?…それはまるで人々を魅了する宝石の様な……………」

五、六歩歩いた所で、悠祐は後ろに振り返って石を手に取った。

「あ!お、お兄、それってまさか……………」

新哉も、悠祐の企みに気付いたらしく、その言葉を遮って口を開く。

「そう!…価値に決まっているだろう」

石を片手で持ち、いかにも貴重な物を見る様な目をしている悠祐。

そんな格好を見て、拾った張本人である新哉は大きく溜め息を付く。
「お兄……まじ?」

「おう、真面目だよ」

躊躇う事も無く、さらりと言って退ける悠祐に軽い驚きを抱く。

「じゃあ、もし価値があったらどうするの?」

「どう、って……この不景気なご時世に寄付なんてすると思うか?」

椅子に座り、足を組みながら、新哉の問いに遠回しな答えを返す。

「……思わない。だってお兄だもん」

「ふう……良いか?お兄は決して、金が欲しい訳じゃあ無いぞ?」

「?」

そう言うと、悠祐はゆっくり椅子から立ち上がって窓の外を眺めた。澄み渡った夜空に輝く星を見て、持っていた石をかざして見てみる。

「もし売れたら、生活費の足し位にはなるかもしれないだろ?」

「え?う、うん……」

その時、新哉は悠祐の立派な一面を見て、強い尊敬の念を抱いた。まさか、家計の為だなんて微塵にも予想していなかったからである。

「僕、お兄の事、少しだけ見直しちゃった!」

新哉は、さも嬉しそうな表情で言葉を出す。

それを見て、悠祐も自然と顔を綻ばせた。

「だろ?さあ、もう子供は寝る時間だぞ」

悠祐の声に反応し、新哉が壁に掛けてある時計に視線を送る。

時刻は、夜の十一時を過ぎた所であった。

「子供って……中学一年生は一人前だよ?」

「ばか。中一と高二じゃ年の差があるだろ?俺から見れば、まだまだ若造だったの!」

「な、何だよ!お兄だって子供じゃないか!」

悠祐の何気無い言葉が口火となり、どんどん口喧嘩は白熱して行く。大体週一のペースで、こうした言葉の戦いは勃発しているのだ。

「大体お兄は、いつも言いすぎるんだよ!」

「それは、お前があまりにも突っ込み所満載だからだったの!」

「お兄だつて！少しは見習える所くらい作つてみたらどう？」

「あつ！このやる、禁止ワードをさりげに出しやがったな？」

お互いに、言いたい事を相手に向かって遠慮無くぶつけている。

暫く時間が過ぎ、結果は引き分けの様な感じで終わってしまった。

部屋の中に、息継ぎをする音だけが響く。

「じ……じゃあお兄、また明日ね……」

「お……おう、あんま夜更かしすんなよ？」

悠祐の言葉を聞くか聞かないか、新哉は憔悴した態度で部屋を出た。

二人には、ここが溜ったストレスを思い切り発散出来る場所。

そして、兄弟の仲を深める事の出来る場所なのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2079a/>

風にあそばれて

2010年11月14日14時14分発行